

小埼玉沼  
(埼玉)

## 第31話

万葉集と行田<sup>2</sup>

武蔵の小埼玉の沼の鴨を見て作れる歌  
埼玉の 小埼玉の沼に 鴨ぞ翼さる おのが尾に

零り置ける霜を 払うとにあらし

(巻九・一七四四)

この歌は、埼玉の小埼玉沼にいる鴨がはばたいで、自分の尾に降り積もった霜をはらっているというピーンと張りつめた、寒い冬の早朝の風景を歌ったものです。

上の句が五・七・七、下の句も五・七・七と繰り返す形式のこの歌は、施頭歌と呼ばれています。

作者は、常陸国(茨城県)の下級役人であった高橋虫麻呂といわれており、虫麻呂の歌は万葉集の中に三十四首が残されています。虫麻呂は、藤原不比等の子藤原宇合の配下で、宇合に歌の才能を愛され、歌人としても知られていました。

埼玉新聞に昨年連載された「万葉のさいたま」によれば、埼玉郡の郡役所での歓迎の宴の時、接待側から歌を所望され、即興的に作ったのがこの歌で、前日の早朝に見た小埼玉沼の景色をイメージしてつくったものではないかと藤倉明氏は想像されています。

当時の郡役所は、下埼玉の盛徳寺周辺にあったと思われる、虫麻呂の宿舎もこのあたりだったのでしょう。

東に小埼玉沼、西にさきたま古墳群が広がる、当時そんな風景であったと思います。

小崎沼  
(埼玉)

## 第32話

万葉集と行田<sup>3)</sup>

埼玉の津に居る船の風をいたみ

綱は絶ゆとも 言な絶えそね

(巻十四・三三八〇)

歌の意味は、津は船着き場・河岸のことであり、埼玉の津に帆を降ろしている船が、風をいたみ、つまり激しい風のために綱が切れても、大切なあの人からの音信(便り)が絶えないように、と考えられています。冷たい北よりの季節風にゆさぶられる船の風景と、男女のゆれ動く恋の感情とを重ねあわせて詠み込んだ歌で、東歌の中の相聞歌に分類されるものです。

東歌は、七世紀末から八世紀中頃の東国関係の二百三十首あまりの総称で、現在の中部地方、関東地方の人々の作品です。豊かな方言を使い恋・旅・労働などの歌を発想豊かに歌い上げています。

この歌は、男女どちらが歌ったものかはつきりしていません。どちらともとれます。『行田市史』では、男性側から歌ったものだと考えています。女性が歌ったものとする考えも無論あります。いずれにしても男女を問わず長い問歌い継がれてきた歌と思われれます。



小埼玉沼  
(埼玉)

## 第33話



## 万葉集と行田4

下埼玉の水田の中に、小さな森が残されており、その森の中に墓石のような石塔があります。

この写真の石塔は、宝曆三年（一七五三）に忍城主阿部正因が国文学者平岩知雄に命じて建立した万葉歌碑です。

正面に武蔵小埼玉。側面にこの碑を建てた目的をあらわした文章。裏面に小埼玉と埼玉の津の万葉歌が彫られており、前玉神社の石灯籠建立から五六年あまり後のことです。

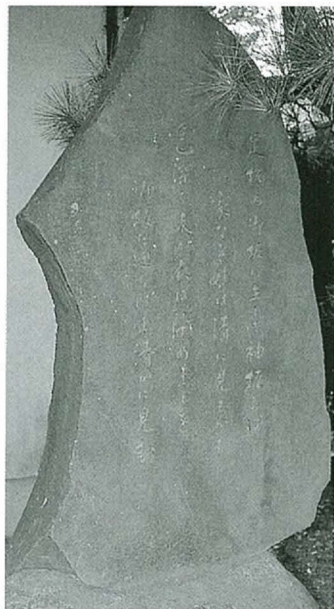
碑を建てた目的の文章の最初に武蔵小埼玉はここだと断定しています。まさにそのことを石に彫り後世に残すことが、この碑を建てた理由だったようです。

なぜそのような事が必要であったのか。実は、万葉集への関心が高まるとともに、小埼玉のあった場所も色々と考えられたようです。後に書かれた『新編武蔵風土記稿』でも現在の羽生市尾崎とする説を取り上げていますし、岩槻市尾ヶ崎などとする説もあつたようです。それに対して小埼玉と埼玉の津はここだと宣言したのがこの歌碑であった訳です。

この碑を建立した忍城主阿部正因は、阿部家五代目。大阪城代から老中になった人で寛延元年（一七四八）から安永九年（一七八〇）まで三十二年余り忍城主でした。

八幡山古墳公園  
(藤原町)

第34話

万葉集と行田<sup>5</sup>

足柄の み坂に立して 袖ふらば  
家なる妹は さやに見もかも

(卷二〇 四四二—三)

右一首 埼玉郡上丁 藤原部等母磨

色深く 背なが衣は 染めましを

み坂たばらば まさやかに見む

(卷二〇 四四二—四)

右一首 妻 物部刀自壳

歌の大意は、夫の等母磨が防人として西国に行く途中、足柄峠で袖を振ったならば、家に残った妹（妻の意味）にも、はっきり見えるであろうか。妻からは、もっと色を濃く背（夫）の衣を染めればよかった。それなら、足柄のみ坂を通ったら、はっきり見えるであろうに。と唱和したものです。

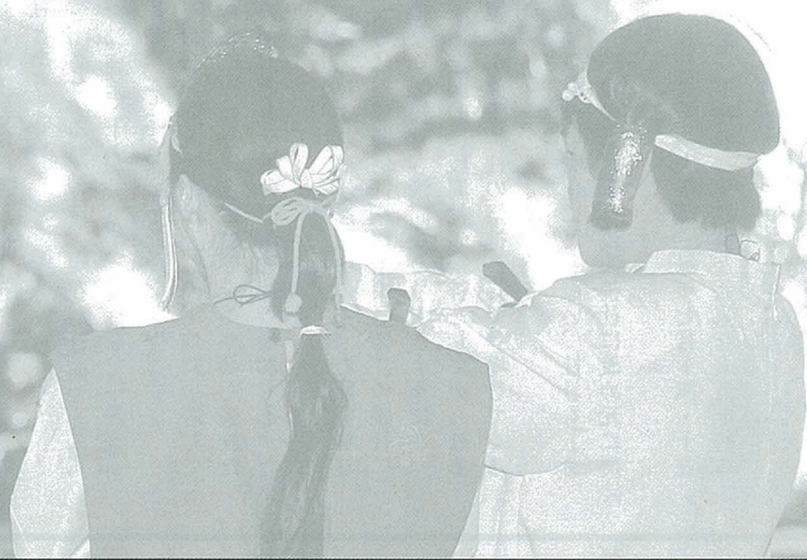
この歌は、天平勝宝七年（七五五）二月に武蔵国防人部領使、安曇宿禰三國が推薦した二十首の中で採用された十二首の一つです。

地理的には行田から足柄峠は見えるわけがなく、出発前に衣の色にことよせて、別れの悲しみを夫婦間で取り交わした歌です。

等母磨夫妻が埼玉郡のどこに住んでいたかは、これだけの資料では判断できませんが、昭和十九年埼玉県では旧太田村若小玉を推定地として指定し、昭和三十六年現在地に篤志家の寄付により歌碑が建てられました。



行田の神々





# 前玉神社

(埼玉)

## 第35話



平安時代の延長五年（九二七）に完成した『延喜式』の中の神名帳に登録された神社を式内社といえます。行田が含まれる埼玉郡は四座。前玉神社二座、玉敷神社、宮目神社とあります。

前玉神社二座とある祭神は、現在では前玉彦命、前玉姫命の二神ですが、かつては大己貴命、木之花開耶姫命などとする説が考えられてきました。

祭神の前玉彦命・前玉姫命は、この土地に土着していた神々であり、それを埼玉古墳群を築かせた豪族たちが祀ったのが、そもその前玉神社の最初であったはず。

神社の言い伝えによれば、忍城中にあった浅間神社を勧請してからは、浅間信仰（富士山信仰）の盛行に合わせ盛んになり、社号も浅間社と号するようになったといえます。全国的に浅間社の祭神として祀られる木之花開耶姫命が前玉神社の祭神として登場してくるのもそのためです。

明治初年、神仏混合の廃止にともない、社号も上ノ宮を前玉神社、中腹の下ノ宮を浅間神社に改め元に戻したといえます。

浅間信仰にもとづく初山祭は、毎年七月十四・十五日に大祭を迎え、子供の無病息災と元気な成長を祈る祭りとして現在でもさかんに行われています。

前玉神社  
(埼玉)

## 第36話



郡名のもとになった祭神の前玉彦命、前玉姫命に  
関連して、郡名について考えてみます。

前玉郡の使用例は、奈良東大寺正倉院に伝わる文書の中で神亀三年(七二六)に書かれた山背国(現在の京都府)の戸籍帳に武蔵国前玉郡に逃亡するとしてくるのが最初です。埼玉郡の場合は、『続日本紀』天平五年(七三三)六月条に武蔵国埼玉郡とあります。現在の東京都国分寺市に武蔵国分寺が造営されました。この時各郡から献納された瓦に使われた郡名は前玉と埼玉の両方があります。万葉集の巻二〇に天平勝宝七年(七五五)に進献された防人・藤原部等母磨の歌がありますが、彼の身分は埼玉郡上下です。同じ万葉集の中に小埼玉、埼玉の津の歌がありますが、使われる漢字は前玉・佐吉多万で、サキタマと読ませています。

前月号で紹介した延喜式神名帳(延長五年九二七)には武蔵国埼玉郡・前玉神社二座とあります。

わが国の最初の百科事典といわれる『和名類聚鈔』(九三一〜九三七年頃成立)には、埼玉郡を「佐伊太末」と読ませています。

以上のことから、使われる漢字は前玉郡から埼玉郡へ。読み方もサキタマからサイタマへと古代において変化したようです。



# 行田八幡神社 (行田)

## 第37話



八幡神社は、「お稲荷さん」とともに、私たちに馴染みの深い神社で、全国の神社のおおよそ三分の一が八幡神社であるといわれています。行田市市内でも宗教学方法としての八幡神社は五社あります。

行田八幡神社は、もともと佐間村分の田中にありましたが、江戸時代の明暦元年（一六五五）に城下町を拡張したとき現在地に移し、拡張した町名も八幡町と名付けられました。

祭神は誉田別命。応神天皇のことです。応神天皇は『日本書記』によれば第一五代の天皇で、墓は大府羽曳野市にある全長四百メートルあまりの大前方後円墳が想定されています。

八幡神そのものは、名前はよく聞きますが、その正体については実はあまりよくわかっていません。これまでの研究によれば、原始的な八幡信仰から、応神天皇をまつる応神八幡信仰へ変わり、さらに道教や仏教の影響を受けた八幡大菩薩信仰から武神八幡信仰へと変わったといわれています。

八幡町に移されて以来、忍城主の信仰も厚く社殿や境内も整備されましたが、江戸時代の終り頃、弘化三年（一八四六）の伝兵衛火事といわれる行田町大火で全焼。嘉永七年（一八五四）に行田四町の寄進により再建されました。現在の社殿は平成元年に新築されたものです。

# 諏訪神社

(忍)

第38話



「お諏訪さん」として親しまれているこの諏訪神社は、忍城の総鎮守でした。忍城の築城に際して成田氏が勧請しました。持田村から遷した、あるいは忍城の築城以前からあったともいわれはつきりしません。本社は長野県諏訪の諏訪大社であり、祭神も同じ健御名方命。諏訪大社は、諏訪湖を挟んで上社、下社に分かれ、七年ごとに行われる「御柱祭」や冬の「御神渡」の儀式は有名です。「御神渡」は、諏訪湖の結氷により起こる亀裂により、その年の豊作を占うものですが、同時に上社の男神が下社の女神のところに通うという伝説が付随しています。

忍の諏訪神社にも同じ言い伝えがあり、忍の諏訪神社が男神、佐間の諏訪神社が女神であるといわれています。

忍の諏訪神社に関わる他の言い伝えでは、立木を切ると血が流れる話や、神社の周辺の立木を切って持ち去る泥棒を見つけ不心得を論じたところ、その晩に髪もひげも真白な品のよい老人が訪ねて来て、川えびを置いていった話。道路工事で立木を切るのをやめさせたら同じように川えびを置いていった話など、諏訪の神様が髪もひげも真白な品のよい老人の姿をして礼をする話が明治二〇年代の事として伝えられています。



## 二ノ丸稲荷(忍)

## 第39話



諏訪神社の社殿のすぐ東側にあります。名前の通り元は忍城の二ノ丸にあったものです。

この稲荷には、こんな話が残っています。

隠居した元の忍城主成田長泰に、昔妻子を殺された真紅の狐が復讐しようとしたが、弓の達人に胸を射ぬかれ、怪力の侍に取り押さえられる所をやつと逃げた。長泰は、翌朝夢の中でこの狐からいきさつを聞いたという番人の話を聞き、若い頃親子づれの狐を弓で殺したのを思い出し、悔やみ、狐のために祠を建てて祭ったという。それがこの二ノ丸稲荷で、四百三十年ほど前の話です。

二ノ丸稲荷とは反対の西側に、多度社と一目連社があります。両社とも文政六年（一八二三）に伊勢国（三重県）桑名城から転封してきた松平氏が桑名から遷したものです。

行田周辺ではあまり馴染みのない多度社と一目連社ですが、本社は桑名に近い多度山にある多度大社で、「雨乞い」の神として広い信仰圏を持っています。多度社の祭神は、天津彦根命で、天照大神の第三子。一目連社は、多度大社の別宮で、祭神は天目一箇命。天津彦根命の子とされています。

多度社と一目連社は、元は帯郭にあったものですが、二ノ丸稲荷と同様に明治六年の忍城取り壊し後に現在地に遷されたものです。



東照宮  
(忍)

## 第40話



江戸時代の文政六年（一八二二）に桑名城主から忍城主となった松平忠堯が勧請したもので、文政八年下荒井（現在の城西地区）に社殿が建立されました。明治維新後の明治七年城主松平家の東京移住に伴い、社殿ごと現在地の諏訪神社境内に曳き移されました。

この松平家は、家康の長女亀姫の四男忠明から始まった家で、忠明が大坂城主であった元和二年（一六一六）、家康が亡くなり翌三年現在の大阪市北区にあった下屋敷内に東照宮を勧請したのが松平家の東照宮の最初です。以後松平家は城を移るたびに東照宮を勧請しており、行田の東照宮もその中の一つです。

祭神は東照権現。家康のことです。代表的な宝物として家康画像とそれを模したといわれる木像があります。画像は亀姫が嫁ぐに際して父家康に望んで絵師に描かせた四二才頃の生前の姿であるといわれています。これらの宝物は鳥羽伏見の戦いの戦火から逃れるために大坂の東照宮から松平忠誠が帰国に際して忍に移し奉納したものです。

東照宮といえば、家康の命日である四月十七日の例大祭は、市民に馴染みの深いお祭です。この祭礼は、江戸時代は普段は入れない一般庶民にも特別に公開され、露店もならば、それは賑やかな祭りであったことが記録に残されています。